

20. ^{123}I -IMP 脳血流シンチグラフィによる脊髄小脳変性症の評価

佐藤 修平	竹田 芳弘	巻幡 栄一
奥野 恵子	栄 勝美	金澤 右
藤島 護	河野 良寛	清水 光春
平木 祥夫		(岡山大・放)
松本 洋輔	黒田 重利	(同・精神)

脊髄小脳変性症患者 5 例に対して、頭部 MRI 検査および ^{123}I -IMP による局所脳血流量の定量検査を施行した。MRI は水平断および矢状断を撮像し、定量は Super Early 法および Early 法を施行した。

定量検査の結果、小脳の血流は、Early 法にて全例 40 ml/100 g/min 以下に減少していた。洗い出しの影響はほとんど認められなかった。MRI では、4 例は小脳の著明な萎縮を認めたが、最も罹病期間の短い 1 例では萎縮は軽度であり、本疾患の初期例である可能性が示唆された。

21. 脳腫瘍における ECD と HMPAO による SPECT 画像の比較

棚田 修二	村瀬 研也	井上 武
菅原 敬文	奥村 明	藤井 崇
木村 良子	濱本 研	(愛媛大・放)
大田 信介	榊 三郎	(同・脳外)

脳腫瘍における $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -ECD と $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HMPAO の SPECT 画像の違い (通常 ECD は腫瘍部で集積低下や欠損を示す) の原因を明らかにするために、10 例の患者に両薬剤を投与し、dynamic SPECT と動脈採血を行い、4-compartment model による動態解析により各種パラメータを比較検討した。血中から脳への移行 (K1) と脳からの逆移行 (K2) はともに ECD の方が腫瘍部では小さい傾向にあったが、停滞率 (K3/(K2+K3)) は逆に ECD の方が大きい例が多かった。脳への移行と停滞率の積である集積率は、SPECT で観察される放射能を表すが、これは ECD の方が小さく、SPECT 画像の違いは集積率の差に起因すると考えられた。

22. 肺癌の ^{201}Tl 腫瘍シンチの経験

藤田 岳史	菅 一能	内迫 博路
米城 秀	有田 剛	田中 陸雄
中田 太志	中西 敬	(山口大・放)
濱中祐一郎	鈴木 敬	(同・二外)
宇津見博基	山田 典将	(同・放部)

肺癌は甲状腺癌、肺癌同様に ^{201}Tl による陽性描出が可能である。今回、肺癌 9 症例の ^{201}Tl SPECT を経験したので報告した。肺癌 9 例中 6 例で ^{201}Tl の集積を認めた。腫瘍形成性肺炎では集積を認めないといわれており、今後、鑑別診断に有用になることが示唆された。また、経過を追えた 3 例において、 ^{201}Tl の集積の程度は、血清 CA 19-9 の値と相関を示し、肺癌治療後の経過観察、治療効果判定にも有用であると考えられた。

23. $^{99\text{m}}\text{TcO}_4^-$ の軟部腫瘍への集積の検討

大内 泰文	岩宮 孝司	周藤 裕治
谷川 昇	遠藤 健一	西尾 剛
水川帰一郎	沢田 敏	太田 吉雄
		(鳥取大・放)

$^{99\text{m}}\text{TcO}_4^-$ は、甲状腺、唾液腺領域で使用されているが、腫瘍シンチグラフィとしての報告は少ない。今回 $^{99\text{m}}\text{TcO}_4^-$ シンチグラフィを施行した 3 例の軟部腫瘍 (schwannoma, neurofibromatosis, MFH) を経験し、腫瘍シンチグラフィとしての有用性につき検討した。 $^{99\text{m}}\text{TcO}_4^-$ シンチグラフィは Ga シンチグラフィと比較し病変部のコントラストは良好で、Ga シンチグラフィで異常集積を認めなかった 1 例においても、病変部を明瞭に指摘でき、腫瘍シンチグラフィとして有用である可能性が示唆された。静注早期の病変部への集積は pooling であるとの報告があるが、今回われわれの検討は 3 時間後の撮像であり、腫瘍組織の trapping 機序の存在が考えられ、今後症例を重ね比較検討が必要と思われた。